

共同助成(青森県遊技業協同組合)

「青森ねぶた祭のパワーで集団移転先の新しいコミュニティづくりを」事業

新しいコミュニティづくりが本格化する被災地で郷土の誇りとなる祭りを育成

心が騒ぎ、体が騒ぎ、居ても立ってもいられなくなる状態を、津軽地方の方言で「じゃわめぐ」という。「東日本大震災の被災地のために何かできることはないのか」と、郷土の祭り「ねぶた」を愛する人たちが「じゃわめいだ」。ねぶたが被災地で運行され、被災者の心を慰めた。そして今、それは新たなコミュニティの拠り所となろうとしている。



被災地の夏祭りでもねぶたを運行



総勢60名以上、青森から大型バスやトラックで駆けつけた

被災地に元気を届けたいという思いで始まったねぶたを心から愛する有志によるねぶた運行

「ねぶた」に様々な形で関わってきた人々を中心となり、2011年に結成された「NPO法人青森じゃわめぎ隊」では、大型ねぶたの運行団体に呼び掛け、運行に必要な機材を借り集め、ボランティアや寄付を募り、震度5弱、8~10mの津波、大規模火災に見舞われ、死者・行方不明者数825名(2018年2月7日現在)という甚大な被害の出た岩手県山田町で2011年9月24日、「まるごと青森」ねぶた運行を行った。

総勢200名以上、バス6台、山車や機材などを乗せたトラック6台というねぶたの大遠征はメディアでも大きく取り上げられ、その年の11月には福島県新地町からも呼ばれ、「復興産業祭り」のメインゲストとしての運行も行った。翌年8月、「青森じゃわめぎ隊」は宮城県東松島市の矢本

運動公園仮設住宅自治会から依頼を受け、夏祭りに出向いた。ここは、東松島市で最大規模の仮設住宅であり、それまで様々なイベントを行っても、住民はなかなか外に出てきてくれなかったという。しかし、ねぶたの熱気は、住民の閉ざされた心のドアを開けるのに十分だった。

以来、「青森じゃわめぎ隊」による東松島市でのねぶた運行は続いた。「ねぶたは山車、お囃子、山車の周りで踊るハネが三位一体となったものですが、青森のねぶたが東松島市の人々に受け入れられたのは、こうした祭りに「じゃわめぐ」血が、共通して流れているからだ」と、理事長の工藤信孝さんは話す。

運行に使う山車は毎年、実際に青森ねぶたで使われる小型のものを譲ってもらい、太鼓や電飾、台車などの機材とともにトラックに積み込んで運び、現地で組み立てて使うという。

まちづくりが本格化する東松島市で新たな地域の祭りとして期待されるねぶた

AJOSCと青森県遊技業協同組合の助成を受け、2017年8月19日にも東松島市でねぶた運行が行われた。復興が続く東松島市では仮設住宅からの移転先が誕生しており、中でもJR東矢本駅北側に整備されたあおい地区には580戸、約1,800人が移転することになっている。

「青森じゃわめぎ隊」では2014年から従来の矢本運動公園仮設住宅に加え、入居が始まったあおい地区での運行を行っていたが、昨年は新たなコミュニティづくりが本格的にスタートしたあおい地区の夏祭りのメインイベントとしての運行だった。

「大型バスとトラック2台で早朝、青森を出発して、昼過ぎに現地に到着。そこから山車や太鼓を組み立て、15時過ぎからねぶた囃子の模範演奏、ハネト演奏、あおい地区のみなさんの太鼓体験、ハネト体験、子どもたちを対象にした団扇コンテストなどを行い、18時頃から約2時間、あおい地区のメインストリートを約2kmにわたってねぶた

の運行を行いました」と、工藤さん。青森からの参加者に加え、仙台や東京などからも約20名が応援に駆け付け、60名を超す参加者になった。今回は地元の「大曲浜獅子舞保存会」にねぶたで使用される横笛を寄贈し、お囃子を練習してもらい、実際に囃子方として参加してもらったという。

「これからは『あおい地区のねぶた』になっていけるよう、少しずつお手伝いをしていきたいと思っています。将来的に祭りのゲストとして招待していただけるようになることが夢です」と、工藤さん。準備段階からの労力や活動資金などの問題があるが、今後も東松島市との交流を継続していきたいと抱負を語った。

青森県遊技業協同組合より

被災地を元気づける活動やコミュニティ活性化にねぶたが役立っていることを誇りに思います。大変な苦労があると思いますが、継続的な活動を期待しています。



弁慶をモチーフにしたAJOSCのロゴが入ったねぶた



ねぶたの運行で被災地の人々と一緒に盛り上がる

助成団体: 特定非営利活動法人 青森じゃわめぎ隊

<http://www.jawamegitai.or.jp>



2011年から計14回、復興支援のねぶた運行を行ってきました

「日本一のまちづくり」を目指し、新しい故郷を作り出そうとしているあおい地区のみなさんから、「今年も待っていたよ。ありがとう」と声をかけていただけることが最大のやりがいです。活動資金の確保などの問題があり、今後どういう形になるか不透明ですが、被災地の移り変わりをこの目で見てきた場所ですので、何かしらの形で交流を続けていきたいと思っています。

NPO法人 青森じゃわめぎ隊
理事長 工藤信孝さん